

論壇

温室ガス後世に影響深刻

気候変動の問題は経済学では外部性とか外部効果と呼ばれる現象である。私たちが日々行っている経済活動が温室効果ガスの蓄積を通じて地球環境を破壊するのだ。温暖化が進むことで、北極などの氷が溶けて低地は海面下に消えてしまう。熱帯地域の海水温が上がると、これまで経験したことがないような激しい台風が襲ってくる。マラリアなどの熱帯性の病気が温帯地域にも広がる。農業にも深刻な影響が及ぶ。

外部性というのは、私たちが生

伊藤 元重

学習院大教授(国際経済学)

活をするときに、そうした影響を考えないで活動することから生まれる問題だ。一人一人は自分の利害にそって行動をしているのだが、それが結果的には私たちに深刻な影響を及ぼす。

やっかいなのは、この外部性が同世代で起きるだけではないこと

気候変動と「外部性」

だ。今の私たちの行動が何十年か後の世界の人たちに深刻な影響をもたらす。いまでも対応をしなければ2050年あるいは3000年の頃には大変なことになっていく。その時の人々は困るだろうが、私たちの世代の多くはその頃にはこの世にいない。そうすると、加

害者は私たちであり、被害者は将来の人たちということになる。

スウェーデンの16歳19年当時)の環境保護活動家の少女グレタ・トゥンベリさんは、ヨットで大西洋を渡りニューヨークでの国連の気候変動会議に参加したことで話題になった。飛行機では温室効果

ガスを排出するというメッセージが込められているのだろう。彼女の主張が世界の多くの若者に支持されるのは、若者は気候変動の被害者であるからだ。加害者は私たち世代であり、被害者は若者であるということだ。

もっとも加害者ということにな

ると、時代をもっとさかのぼることが出来る。200年以上前の産業革命の時代から、人類は石炭などを燃やし続け、それが温室効果ガスを蓄積させてきた。そうした過去の経済活動のつけも大きい。

途上国が先進国を批判して、「これまで温室効果ガスを出してきたのは先進国なのに、途上国に過度な排出抑制を求めて経済的に困窮させるのは困る」というのも説得性のある議論である。

政府と市民問われる覚悟

このように、気候変動の問題は時代と空間を超えた壮大な規模の外部効果であり、その加害者と被害者も錯綜している。経済活動をしている限り、今の全ての人が加

害者であると言ってもよいかもしれない。これを是正することは容易なことではない。ただ、何も行動を起こさなければ事態は深刻になるばかりである。

いま、この気候変動の世界で大きな変化が起きつつある。欧州や米国で気候変動への対応を加速化させようという動きが強まっている。日本もそうした動きから無縁であることはできない。日米欧という先進国の経済外交においても、日本が気候変動対策としてどれだけの強い姿勢を見せるのかが注目されている。もっとも政府だけが動くわけではない。私たち市民の一人一人がこの問題をどこまで深刻に受け止めているのか、その覚悟が問われているのだ。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。